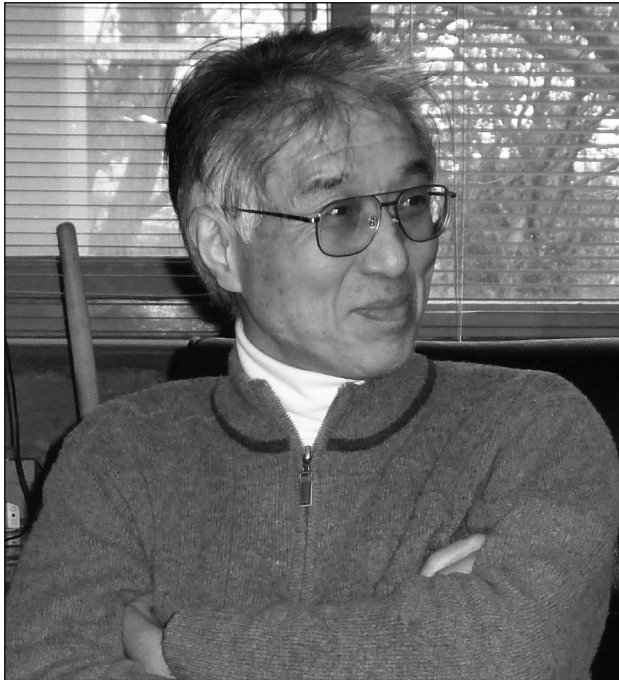


# 私の唯一の希望は、 人々が賢くなることです



小出裕章さん

長年にわたり反原発を貫き、最も信頼される専門家

前回、小出さんにインタビューしたのは原発事故から1ヶ月ほどすぎた去年の4月のことだった。そして今、ちょうど事故から1年というところで、現在のフクシマをめぐる状況をどうとらえ、何が問題なのか、また政府・東電のまやかしはどこのかを原子力の専門家として聞かせてもらった。しかし残念ながら汚染食品を食べることや瓦礫の問題、再生可能エネルギーのことなどまだまだ聞きたいことはたくさんあったが、時間が足りずになかなかできなかった。それでも事故から1年たった今、私たちがこれから長く続くフクシマ後の世界をどんな心構えで生き抜いていけばいいかのヒントをもらえた気がする。なお海外との共同のインタビューだったので、日本を外から見た視点の質問も含まれています。  
(聞き手・文責・浜田)

—— 事故からもうすぐ1年がたちますが、政府が去年の暮れに収束宣言を出しました。実際にはどうみても収束にはほど遠い状況で、マスコミからも批判されていますが、小出さんが見て今どういう状況だと思えますか？

小出● まず、どうなってるかわからないんです。それが一番の問題です。壊れているのが火力発電所なら簡単です。行って、見て、さわって、どこが壊れているかを調べて、なおせばいいのですが、原子力発電所の場合には放射能があるので、行くことすらできない。現場を見ることもできないし、さわることもしないですね、まずは。もちろんそういうことは、原子力を進めてきた人達も知っていたわけですから、人間が目で見たりできないのであれば、測定器をあちこちに配置しておいて、その測定器からの信号で判断をしようというシステムとして原子力発電所をつくったんです。しかし今回のような事故が起きるといことは、彼らは想像もしていなかったわけですから、今回の事故のようなことをきちっと知ることができるような測定器が元々配置もされていない。まがりなりにあったものは、次々と壊れていって、情報が正確かどうかもわからない。今そういう状態にあります。

—— 2月になって2号機原子炉の温度が急上昇

してマスコミでも大騒ぎしてましたね。

小出● はい。あれは測定器が故障してしまっただらうと私も思います。どの測定器がちゃんとした信号を送ってきてくれるのか、それすらもわからないですね。私が心配しているのは、炉心と言っている一番大量に放射性物質を内蔵していたその部分が、いったいどこにあるのかということが、一番知りたい心配です。東京電力にしても政府にしても、その炉心という部分は溶けてしまったと認めているわけで、溶けてしまえば原子炉压力容器という圧力釜の底に落ちる。でもその圧力釜は鋼鉄製ですから、それもまた溶けてしまうということは当たり前のことであって、更にまた下に落ちていく。そこは原子炉格納容器と私たちが呼んでいる容器ですけど、底に落ちた炉心が今どういう状態になっているか、そこが知りたいのですが、知る手段がないんです。つい先日、東京電力が格納容器の中に内視鏡のようなカメラを入れて中を見ようとしたのですが、猛烈に蒸気が充満しているし、放射線が飛び交っていて映像が傷だらけになってしまって、ほとんど中を見ることができない。もともと東京電力は、どこまで水が入っているかということを見たかったはずなんですけれども、それすら見えない状態でした。水面すら見えないし、溶けた炉心がどこにあるかということももっと難しくわからない

んです。東京電力は計算をして、まだ格納容器の底のコンクリートの床張りの何割かは壊れているけれども、まだ少し残っているという、そういう計算結果を出しているのですけれども(笑)、そんな計算なんて、状態がどうなっているのかもわからないのに、計算したところで意味があるような結果が出るはずもない。マスコミはみなその計算結果をまことしやかに報道しましたけれども、そんなもの、信頼出来るようなものでは全然ない。結局どこにあるのか未だに分からないという、そういう状態です。

もし、溶けてしまった炉心が、すでに格納容器の底を貫いてしまっているとすると、格納容器というのは放射能を閉じ込める最後の防壁ですから、それが破られてしまったら、いわゆる地下環境に出ていってしまっているということになりますので、汚染を食い止めることがものすごく難しくなる。早く手を打って、地下水に炉心が接触しないようにする。仮に接触するにせよ、その地下水が外に出ないように防壁をつくるか、そういうことをもっと早くやらなければならない。私はそれを5月から言い出したのですが、けっきょく東京電力も国もやろうとしなかった。で、ある時に、工程表を改訂したときに、やるということが案の中に入ってきてますが、それが完成するのは2年後だということになっていて、それではもう意味がないんです。

遅すぎると私は思います。

それが私の心配の一つですし、もう一つの心配は炉心以外に大量の放射性物質があるのはどこかということ、使用済み燃料プールです。それは1号機にも2号機にも3号機にも4号機にもそれがあって、そのプールの底に大量の放射性物質を抱えたままの使用済み燃料が沈めてあって、それを水で冷やしているという建前になっているのですが、その使用済み燃料プールの冷却に失敗するようなことになれば、プールは格納容器の更に外側にありますので、もう放射能を閉じ込める機能は何にもないまま、放射能が外に出てきてしまうということになります。ですから使用済み燃料プールに入っている燃料を、なんとか安全な場所に移さなければならないという仕事があるんですが、使用済み燃料プールがあるところは、もう爆発で建屋が吹き飛んで崩れたり、プールの中にも瓦礫が降り積もっているのです、そういうような状態で使用済み燃料を取り出すということはものすごく難しいだろうし、それをやるためにはこれから何年もの時間がかかってしまう。

特に問題なのは4号機の使用済み燃料プールなんですが、4号機の原子炉建屋は、使用済み燃料プールが埋め込まれている階もすでに爆発で損傷していることがわかっています。つまり使用済み燃料プールがちゃんとした構造で保つことができないような状態で壊れている。東京電力はそれに気がついて、とにかく4号機の使用済み燃料プールが壊れたらおしまいになってしまうということで、耐震補強工事をやったと言っています。でも猛烈な被ばく環境ですから、そこでちゃんとした工事をゆっくりやるなんてことはできなかったわけだし、ほんとにどこまで有効な耐震補強工事ができたのか、私はとても不安なのです。今でも東北地方の太平洋岸はたびたび余震が起きています。もしこれから、ほんとに大きな余震が起きて、4号機の使用済み燃料プールが壊れてしまうというようなことになれば、これまで放出されてきた放射能に比べてたぶん10倍という放射能が出てきてしまう危険があるだろうと思います。要するに冷却ができなければ燃料は溶けてしまい、そうすると格納容器の中にあるのではなくむき出しの環境で溶けてしまうので、大量の放射性物質がそのまま環境に出てきてしまうということにならざるをえません。

いま私たちができることは、4号機の使用済み燃料プールが崩れ落ちるような余震が起きないでくださいと、願うことしかできません。ほんとに神頼みという状態になっています。

—— 政府はさいしょのうちは脱原発依存だとか言いながら、さいきんではまた原発を動かそうとしてるんじゃないかという気がするんですが、例えば今、原発の稼働は40年までにするんだということを打ち出していますね。それについてはどう思われますか？

小出● 原発を40年で廃炉にすると日本政府は言った。それでみなさんは、40年以上は動かさないんだから安心だというふうに受け止めたかもしれませんが、私は実は逆に受け止めていて、日本政府は40年たつまでは動かさずにつけるという宣言をしたと受け取ったのです。つまり、今もう日本中で動いている原発は1基か2基しかないはずで、50数基はすでに止まっているわけです。それはもちろん40年を超えている原子炉もあるし、まだ新しいものもあります。私はそれらすべてをもう二度と動かしてはいけないと言っているわけですが、日本政府は40年までは動かしていいと宣言したわけですから、今止めているものを次々と再稼働させると、そういう宣言をしたわけですから、まあ40年を超えてる敦賀であるとか美浜とか、そういう数基の原子炉は40年で廃炉という原則に照らせば動かさないことになるかもしれませんが、でもほかの50基くらいはこれから動かすぞと宣言したんですね。その上で、特別な場合は20年まで延長を認めるというような、つまり60年までは動かしていいということを言っている。つまり全部の原発を再稼働させるといふ、そういう宣言をしてきたのです。

—— 結局今までと変わらないわけですね。

小出● そうです。何の反省もしていない。一時期は世論という人々の原子力を見る目が厳しくなったときには、なんとなくしおらしい顔をしていたわけですが、今ではもうとんでもない話で、これからがんがん原子力をやるぞと、そのための方策を次々と出しているという。そういう段階になっています。

—— 政府はEPZ(緊急時計画区域)の範囲を拡大しましたが、でもこれもけっきょく原発の稼働を前提にした話ですね。

小出● そうですね。今までのEPZは8kmから10kmでおさまってしまう範囲でしたけど、それが事実によって否定されてしまったわけですから、もちろんそれを広げなければならないというのは当たり前のことです。でも私はもうそんな広げるなんて言ってないで、原発そのものを止めるのがいいと思います。でも彼らは、EPZを広げるから原発は安全ですという言い訳にしてる。

—— 原発周辺の土地の汚染がひどいので、除染をして早く住民が戻れるようにしようと言っていますが、除染についてはどうお考えですか。

小出● 除染というのはできません。放射能というのは煮ても焼いても無くなりません。ですから汚れを取り除くとか消すことはできません。唯一できるのは今ここにある汚れを別のと

ころに移すことだけです。それが意味のある場合もあります。実は私はそれをやれとずーっと言ってきた人間で、私の言ってる除染は何かというと、学校の校庭であるとか幼稚園の園庭であるとか、地域の公園であるとか、あるいは家庭で子どもが泥んこになって遊ぶような庭があるなら、そういうところの土を、もう今では遅いかもしれないけれども5cmはぎとれば、放射能の9割くらいはまだそこについている。たぶん今でもかなりついてると思います。ですから子ども達が集中的に遊ぶところの土だけは必ずはぎとって、放射能をどこか別の場所に移すべきだというのが、私の言う除染です。しかしそれすら大変な作業です。それを一番はじめに郡山市の学校ではぎとってやった。で、はぎとった土を郡山市の処分場にもって行ったら、処分場の周辺の住民達が反対したために捨てることのできないまま、また元の学校の校庭に逆戻りしたということがあったんですね。そういう対策は実にばかげているし、もうほんとに覚悟を決めて、子ども達を守るための作業はやる。そしてその放射能は子ども達が接触しないような場所に移すしかないとは私は思っています。そのための場所というのは、いくつか候補がありますけれども、たとえば住民にはほんとに気の毒だけれども、住民がもう二度と入れないほどの汚染を受けた土地というのがあるんです。そういう場所に枝のゴミ捨て場をつくって、そういう場所に捨てるというのは一つのやりかただと思いますし、日本の政府も双葉郡のどこかにゴミ捨て場をつくらせてくれと申し入れたということなんです。

でも私は、それをやる前にやるべきことがあると思っていて、もともと今の汚染というものは東京電力福島第一原子力発電所の原子炉の中にあつたものだし、あるべきものだった。東京電力のれっきとした所有物がいま環境を汚染しているのだから、それは東京電力に返すのがいいというのが私の主張なんです。だからどんな汚染物も福島第一原子力発電所の敷地にもって行けばいい。ただし今、福島第一原子力発電所は戦争状態にあるわけですから、今もって行くのは無理があるかもしれない。それなら、福島第二原子力発電所がごく近くにあるわけですし、広大な敷地がありますので、そこを放射能のゴミで埋め尽くすのがいいとは私は思います。そして埋め尽くした上で、なおかつまだ足りないというのであれば、しかたないから双葉郡のみなさんに頭を下げてゴミ捨て場をそこに作らせてもらうのがいいと思います。

それでも東京電力は福島第二原子力発電所をまた再稼働するということを目論んでいる。私はとんでもないことだと思っていて、まずは自分のやったことの責任は自分でとれと。自分がばらまいた自分の所有物は人に押しつけるのではなく、まずは自分が引き受けなければいけない。それでもどうしても自分では抱えきれないというのなら、まだ話は別だけれども、まずは福島

第二原子力発電所の敷地をきちっと使うべきだと思っています。

いま日本の政府が言ってるのは、除染をすれば人々がそこに帰れるようにきれいになると、そういうニュアンスで言ってるんです。しかし、そんなことはとうていありえない。想像していただければいいけど、大地そのものがよごれているわけです。家だって汚れている、庭だって汚れている、道路だって畑だって林だって山だって汚れている。そんなもの全部土をはぎとって持って行くところがありません。家の屋根を洗ってみるとか、一部分の土をどけてみるとかはできますけど、放射能は実は移動してるんです。山の汚染は里に下りて、里の汚染は川に流れて海に行く。除染をしたといったところで、またそこに汚れが来ますので、簡単に人々が帰れる状態には残念ながらなりません。おまけに政府の言い分は、例えばいま50ミリシーベルト汚れているところの除染をして半分にすればいいんじゃないかと言ってるんですけど、その数字自身が、もうとてつもなく高すぎる。一年間にふつうのみなさんは1ミリシーベルト以上被ばくをしてはいけないというのが日本の法律なわけで、その法律を厳密に適用しようとするれば、いま日本の政府が避難指示を出している面積とは比較にならないほどの広大な土地を無人にしなければいけないほど汚れているわけですし、いま避難指示を出している土地が年間1ミリシーベルトの被ばくで済むようになるには、どんな除染をしたところで何百年もかかります。

—— するとそこに住んでる人達は別の土地に疎開する方がいいということですか。

小出● 私は放射線に被ばくするということは必ず危険が伴うと発言し続けている人間ですし、放射線の管理区域でふつうに生活するというのは私から見るととうてい許し難いことなので、福島県の中通りの人達も含めて、ほんとであれば別のところに避難してもらわなければいけないし、避難してほしいと思います。ただし日本の政府は何百万人もの人達を別の場所に避難させるということではできないというふうにふんだわけで、だから逃げたい人は勝手に逃げなさいと言ってるわけです。補償もなにも政府としてはしません。そうなれば、逃げられる人は少ないです。そうしてしまうと収入の道が断れたり、生活が崩壊したりする。父親は汚染地に残って、母親と子どもだけを逃がすという選択をしてる人達もたくさんいますね。でもそうすると今度は家庭が崩壊してしまうというわけで、どんな選択をしても苦しいという、そういう状態にいま福島の人達は追い込まれている。ほんとにどういうことをすべきかといえば、集落ぐるみ、地域ぐるみでどこかに移住できるように国家がすべきだと思いますけれども、残念ながら私の願いはとうていかなわないだろうなと思わざるを得ないような状況になっています。

—— さっき、法治国家としてはありえないとおっしゃったんですが、その責任の問題について不思議に思うところがあります。この問題はたしかに東電の問題であり、またそれを推進させた国家の問題であり、彼らが責任を負わないといけない。ところが何も変わらないまま、彼らは人々に指示したりあらゆることを決めていく。そういう現実を、日本の市民はなぜぶつ壊さないのかという疑問が常にあるんです。

小出● 私もその通りだと思います。いまこの事態を招いた責任は、東京電力、あるいはその原子力発電所の建設を許した国家にあるはずなんです。私から言わせると、単なる責任なんていう言葉では生ぬるすぎて、犯罪だと思ってるんです。要するに東京電力と国家が犯罪を犯したんです。彼らを処罰しなければいけないし、彼らを刑務所に入れなければならぬ私は思っているんです。でも現実はそのようになって、未だに東京電力も国も一切の情報を独占して、勝手に指示を出しているんです。あの事故が起きてしまって、これまで彼らがやってきた安全だという根拠がすべて崩れたわけです。そこで彼らは今度はストレステストというものを出してきて、それで安全性を確認して原子力発電所を再稼働させると言ってるんですね。なんのことはない、単なるコンピュータの計算だけなんですけど、それを評価するのも相変わらず彼らだと言うんです。もともと彼らはコンピュータを動かしながら福島の原子力発電所も安全だとお墨付きを与えてきた。それが間違えたから、本来なら刑務所に行っていなければいけないと私は思うけれど、その本来刑務所に居るべき彼らがまた相変わらず同じようなやり方で安全性を確認して、原子炉を動かしていいとか言い出している。ほんとに想像もできないほど悪辣なことを彼らはやっていると思います。

—— 原点にもどって、原発はほんとに経済的に効率的なものでしょうか？

小出● 原点にかえて言えば、実にばかげたことでしかないんです。なぜ原子力に夢を持ってしまったかといえば、化石燃料はいずれ無くなってしまふから、未来は原子力だという、そういう宣伝でしたし、原子力というのはものすごく安く発電できる、値段もつけられないくらい安く発電できるという宣伝があって、世界の強国が原子力に関わり始めた。しかしやってみたら、原子力の燃料であるウランはものすごく貧弱だということにまず気づいた。資源の量としては、そんなに多い資源ではなかったのです。いま使える、核分裂をするウランというのは、資源があまり多くないウランの中でも0.7%しかないのです。そんなものいくら使ったって、石油の百分の1のエネルギーしか出ない。石炭に比べたら数十分の1にしかならないという、そ

ういうばかげたものだったんです。それは原子力の専門家の間ではすぐにわかったわけで、次にどうしようかという、燃えない方の成分である238番のウランをプルトニウムという物質に変えて使えば少しはエネルギー源になる。まあ石炭に匹敵するくらいになるはずだということで、高速増殖炉という特殊な原子炉をつくらうとしたのですが、誰がやってもうまくいかなかった。で、ほとんどみんな撤退してしまっただ。日本でも「もんじゅ」という原子炉をつくりましたけれども、1kw/hの発電もしないままつぶれてしまっているという、そういう状態です。

その上で、じゃあ安いのかということですけども、当初言われたように値段もつけられないほど安いなんてことはもちろんなかった。他の発電方法と比べても、どっちが安いのかな、どっちが高いのかなというほどのものでしかなかった。日本では元々は通産省が、その後は経済産業省が所轄官庁になって、原子力発電がいったいどれだけの値段で電気を起こせるかということ度を計算して示しましたけれども、それはあくまでも彼らが原子力を進めたいという意思のもとで、彼らの都合のいい仮定を積み重ねてはじきだした。そうするとなにか原子力は火力よりも安いという数字が出てきていたわけですが、2年ほど前に立命館大学の島堅一さんが、そんな仮定に仮定を積み重ねた計算は間違いで、実際に電力会社がいくらお金を払ったかという有価証券報告書という経営データに基づいて計算すればいいと言ってやってみてくれた。そしたら原子力発電は火力発電と比べてほとんど安くもないという結果になった。そのあげくに、原子力発電というものをやろうとすると、出力の制御ができませんから、夜中など電気の消費量が少なくなった時に電気が余ってしまう。それでしょうがなく揚水発電所というものでエネルギーを蓄えようとしたわけですが、揚水発電所というのは、1回そのサイクルを動かすたびに3割のエネルギーを損するというほどばかげたもので、べらぼうに発電単価が高いんです。ですから原子力発電をやるために必要な揚水発電の電気代も原子力発電のところに乗せしてやると、もう火力より高くなってしまふ。さらに原子力発電というのは膨大な開発費を税金から出してたりするし、また電力会社も膨大なお金を地元にはらまいたりしている。そういうようなお金を考えたら、原子力発電はもう圧倒的に高いということが、事実として示されてしまった。

その上に、と私は言いたくなるんですが、今回の事故のような被害が出ると、それはとうてい金銭で評価できるようなものではない。人々の心の痛みであるとか、お金の換算出来ないものが山ほどあるわけです。仮にお金に換算できるものだけをとったとしても、日本が法治国家として人々を被ばくから守るのであれば、もう何百兆円かかるかわかりません。東京電力

はかんたんに倒産です。何度倒産してもあがないきれないことになる。いま東京電力と日本の国家との間で賠償金の支払いをいくらにするかということで綱引きをしてるわけですけども、日本の国家が倒産してもあがないきれないという、そういう被害が実はもう目の前にあるわけです。それを原子力発電の電気代に上乗せしようとするれば、もう話をするのもばかげているほど原子力っていうのは高い。正常な経営感覚をもっている経営者であれば、原子力だけはやりたくないと思わなければいけないはずなんです。なんというか、この国の経営者は馬鹿ばかりで、経団連の会長ですが原子力をやらないと経済がもたないとか言い出すわけで、もういいかげんにしてくれと私は思います。

—— それほどに原子力には実はお金がかかることがわかっているはずなのに、それでもやるというのは何故でしょう。

小出● 原子力というのは、ほんとの経済原則を適用すれば、とうてい成り立たない。それでもなおかつやろうとするのは、もちろん別の理由があるわけです。2年ほど前に、日本の国営放送であるNHKが「核を求めた日本」という番組を放映しました。日本が原子力に手を染めたのは、平和利用と言いながら核兵器を持つ能力を手に入れるためだったということ、外交文書とか外交官の証言を集めてきて証明した番組です。まさにそうなのです。日本は未だに原子力の平和利用だなんて言葉を使っていますけれども、もともと原子力と核はいっしょのもので、日本という国は核兵器を持つ能力を懐に入れたかったというのが、原子力を進めてきた最初で最後のそして一番根源的な理由です。

—— いま第三世界の国や産油国でさえ原発を持ちたがってますが、それも同じ理由ですか？

小出● もちろんです。いま世界を支配しているのは、国連の常任理事国、つまりアメリカ、イギリス、フランス、ロシア、中国の5カ国で、なぜその5カ国かという核をもっているからです。現在の世界を支配する立場に立ちたければ、核兵器を持つことが必須の条件になっているわけですから、なんとしても他の国も核兵器を持ちたいと思っている。逆にこの5カ国から見ると、他の国には絶対に核兵器を作らせないということになるわけで、たとえば今イランがウラン濃縮をやろうとすると、イランが核開発をしてるからけしからんといって制裁を加えるというわけです。でもウラン濃縮なんてこの5カ国はみんなやっていますよ。(笑) 日本だってやっています。それでも他の国にはやらせないということで、軍事行動すら辞さないと言い出している。でも逆にそうやってやられる方から見ると、とんでもない世界だと思うわけだし、なんとか自分達が力をつけなければいけないと思う

のもまた当たり前のことです。

—— 原発事故以降、国の原子力関係の審議会や委員会などに反対派の人を入れるようになりましたが、小出さんはそういう場に一切出ないと宣言してるそうですね。

小出● 日本という国家は原子力をやろうということを決めわけです。原子力基本法というものをつくって、平和利用であればどんどん原子力をやりますと法律で決めた。その法律でこんどは原子力委員会というものをつくったんです。原子力委員会は原子力をどう進めていこうかという計画を立案しながらこれまで来ているわけで、今の原子力委員会の委員長は近藤俊介というやつですけども、彼なんかは原子力に反対するようなことを自分がしたら法律違反だと言うわけです。要するに進めるために原子力委員会があるんだし、進めるのが自分の仕事だと。そういうような人間がいま原子力委員会にいるわけだし、原子力安全委員会にしたらって、原子力を進めるという前提があって、その上でどうやって安全を守るかということだけなのであって、進めるということはもう全て決まっています。もちろん行政組織だって進めるための行政をしているわけですから、どんな委員会をつくらうとだめです。ですからもしほんとに原子力をやめさせるのであれば、日本は原子力から撤退するという法律をつくらない限りは何をやってもだめです。

—— ということは政治の世界ですね。

小出● 最後はそこにいくしかありません。

—— 原発というのは国家や知識人や、そういうパワーグループのもので、この世の中はそういうパワーグループに入らないと生きにくいというところがありますが、先生はそういうパワーグループに入らなくてもいいという生き方をされてきてますね。そういう先生の信念というものはどこから来てるんですか？

小出● (笑) 私はそういうパワーグループに入らないからこそ生きやすいのです。自分のやりたいことをやりたいようにこれまでもやってこれましたし、それで生活できないかというそんなことはない。京都大学の教員として、ちゃんと日本の国家が私に給料をくれる。その給料で家族を養える。それで発言を禁じられるということもないまま、私は好きなことができたわけですから、これほど快適な職業はないと思っています。(笑)

たとえば日本では故郷に錦を飾るとか、末は博士か大臣とかか、なにか社会的に認められるような立場になったり、あるいは金持ちになったりというのが人間としての価値のように思わせられてるわけですけども、私はぜんぜんそんなふうには思わないんですね。たった一回しか生きられない命ですから、好きなようにやっていいきたい。もうそれだけしかないし、別に偉いポストになんかつきたくもない。金だって生活できる分だけの金があれば、それ以上にはいらんし、悔いなく生きたいという、ただそれだけです。

—— 日本の原発の問題の核心的なものの一つは、東電とか国家などの情報が、市民とまったく共有されなかったことが、事故の大きな原因の一つだと思います。日本は法治国家であり民主主義であり先進国であるのに、なぜ市民たちに(原発の情報が)共有できなかったんでしょう。

小出● 日本は法治国家ではないし、民主国家でもないし、先進国でもないわけです。

—— 市民たちはなぜそれについて、強く反発しなかったんですか？

小出● それが快適だからです。国家に下駄を預けておくのが快適だからです。昔からですけども、戦争中だってそうです。抵抗する人間なんてほとんどいなかった。みんな国家のいいなりになってればよかったわけだし、抵抗した人間は国家に抹殺されたわけです。国家でもなく、村の中で村八分にされて、同じ人間同士で差別されて抹殺されていく、そういう歴史です。まあ他の国もあんまり変わらないんじゃないかなと思いますが。(笑) 日本というこの国は、みなさんが思ってるほど立派な国ではないです。

—— どうすればいいんでしょうか。今後は。

小出● 私の唯一の希望は、人々が賢くなることですね。自分の命は自分で決めるんだというくらいに賢くなることです。

—— 福島が我々を賢くさせるきっかけになるんでしょうか。

小出● わかりません。もしそれができたとしても、あまりにもひどい代償ですよ。こんなことにならなければもちろんよかったし、でもなっちゃった以上は、このほんとに悲惨な出来事からせめて学んで、人々が賢くなってほしいと私は願いますけれども、でもだめかもしれないと思います。でも希望を失ったら、もうその時が負けですから、絶望をしないで、できることをやろうと私は自分で思います。

—— どうもありがとうございました。

\*小出さんの本をp10で紹介しました。